慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	みんなのためのドイツ語改革? : アバス・キダー『みんなのためのドイツ語』
Sub Title	Sprachreform für alle? Abbas Khiders ,,Deutsch für alle"
Author	浜崎, 桂子(Hamazaki, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.62 (2022.) ,p.67- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	境一三教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kazumi Sakai
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20220331-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

みんなのためのドイツ語改革？
――アバス・キダー『みんなのためのドイツ語』

浜　崎　桂　子

1. はじめに

> ドイツに到着したとき，知っていたドイツ語はたった 3 つの単語だった。Hitler, Scheiße, Lufthansa. 国際的に知られた言葉だ。一度もドイツに行ったことがなくても，この言葉を知っている人は少なくない。（Khider, 2019, 11）

こう始まるのは，イラク出身のドイツ語作家アバス・キダー（Abbas Khider, 1973*）の『みんなのためのドイツ語―完成版教科書―』である。3 つの単語しか知らずにドイツにやってきたキダーは，その後ミュンヒェンとポツダムの大学で文学と哲学を専攻すると，ドイツ語で文学作品を書く作家となり，これまでに 5 つの小説を発表している[1)]。ドイツ語の書き手となったキダーが「この言葉で本を書く以上のことを計画し」（Khider, 2019, 24）た成果が，この「完成版教科書」である。「この小さな本は，まじめな言語学的な戯言」（Khider, 2019, 9）だと序論で宣言されているとおり，語り口もユーモアと皮肉に満ちたこの本を，読者は，キダー流のユーモアとして，しかしまじめに受け取ることになるだろう。また，序言

1）キダーのドイツ語作家としての経歴については浜崎（2018）を参照されたい。

に先立って掲載されたモットーに，「注釈からも希望を読み取ることができる，そうしようとする，そうすることになるすべての人たちへ」とあるのを見逃してはならない。この小論では，キダーの「戯言」からどのような「希望」を読み取ることができるのか，彼が構想する「みんなのためのドイツ語」とはどんなものかを考察していきたい。

キダーのユーモアを読むには，知っていたドイツ語が 3 つだったという冒頭の逸話も，読者は少し注意して受けとる必要がある。なにしろ「ここで語られている出来事はすべてが本当に起きたわけではない。いくつかは私が偽造している。」（ebd.）と序言で警告されているのである。とはいえ，彼がこの 3 つの単語を知った経緯として語られるエピソードは，独裁政権下のイラクから逃亡し，ビザ無しで中東，北アフリカ諸国を数年転々としたのちにドイツにやってきたキダーの経験が，象徴的に反映されたものとして読むことができる。「ヒトラー」という語に出会ったのは，フセイン政権下のバグダッドにおいて，多くの書店で『我が闘争』のアラビア語版が平積みになり，ショーウィンドウにあふれていたからである（Khider, 2019, 11）。「ルフトハンザ」は，「ビザ」や「庇護権」という語と同じように難民たちの「専門語」の一つで，「ヨーロッパと同じく到達できないもの，空飛ぶじゅうたんのようなおとぎ話」（Khider, 2019, 12）を意味していた。„Scheiße“ というドイツ語を初めて聞いたのは，イタリアのボルツァーノの駅である。駅に滞在する難民たちにボランティアとして毛布を配布していたドイツ人の男が，「ドイツでの庇護申請者の生活はどうだ？」という質問に対して，この一言で答え，さらに「これからも，あなたたちはしょっちゅうこの言葉を使うことになるだろうね」と説明したというのである（ebd.）。

政治難民としてドイツに入国したキダーにとって，ドイツ語の習得は，ようやくたどりついた安全な土地で生き延びるための重要な鍵であった。庇護権を獲得することとドイツ語を習得すること，そのプロセスの困難さ，ドイツの法律の条文と，ドイツ語の文法の複雑さについて，キダーは「ど

ちらも泣きたいほど絶望的だ。このふたつの分野のために，その時期，自分は気が狂いそうになったし，逃亡期間中のひどい体験よりも多くの涙を流すことになった」（Khider, 2019, 13）と述べている。

27 歳でドイツに到着してから 20 年近くがたった現在，形容詞の変化，動詞の変化と正しい位置を習得し，30 字以上からなるドイツ語の長い名詞も理解できる自分に「本当に，信じられないくらい誇りをもっている」（ebd.）と述べるキダーだが，そこまでに「10 年以上もいまいましい時間が必要だった」（ebd.）ことを嘆く。そして「将来，自分のような人たちの嘆きの声を聴く必要がないようにしたい」（Khider, 2019, 24），「マーク・トウェインのような人」が，「ドイツ語は，そっとうやうやしく死語の中に取っておかれるべきだ。というのも，死者だけがそれを学ぶ時間があるのだから。」（Khider, 2019, 25）[2] などと言うのを阻止したいし，「ドイツ語を正しく学ぶのに，30年必要だなんていう話[3] はもう聞きたくない。」（ebd.）として，ドイツ語の改革を提案するのである。

先に見た序言で，キダーは「すべての思い付きが独自のものであるわけではない。いくつかは盗んだ，あるいは借りたものだ。」（Khider, 2019, 9）とも言っている。外国語として学んだドイツ語を改革しようというその企み自体も，キダー独自のものではなく，いくつかの前例がある。キダーも名前をあげたマーク・トウェインもその一人であるし，現代のドイツ語作家の中に，ブラジル出身のヅェ・ド・ロック（Zé do Rock）という，ラディカルなドイツ語改革を提案し，実践している作家もいる。まずは，この二人のドイツ語「改革案」を確認したうえで，キダーの改革案

2）キダーは典拠をあげてはいないが，これは次章で扱うトウェインの「ひどいドイツ語」の最終部分からの引用である。訳文は行方均（トウェイン, 1996b, 295）による。

3）これもトウェインの語り手の主張で，先の引用の直前に次のようにある。「言語学の研究の結果，私は才能ある人は（スペルや発音を除いて）英語を 30 時間で，フランス語を 30 日で，ドイツ語を 30 年で学ぶべきだということを確信した。」（トウェイン, 1996b, 294–295）

の具体例を見てみよう。

2. 非母語話者によるドイツ語「改革」の提案

ある言語を学ぶとき，学習者は，母語話者は気がつかないその言語の特徴に気づく。もちろん，その特徴からある事物の新しい側面や，あるいは新しい概念を発見することで，自分の地平が広がる経験もするだろう。しかし，ある言語を習得し，それを不自由なく使用することができるようになるのは簡単なことではない。自分の言語にはない文法的な規則に戸惑い，それを完璧に習得することの困難さにぶつかり，「なぜこのような規則が必要なのか」，「なぜ，もっと単純な表現ができないのか」と疑問に思う。以下に見るトウェイン，ヅェ・ド・ロック，そしてキダーは，そのような視点から「ドイツ語を改革しよう」と申し出ているのである。

2.1 マーク・トウェイン：「ひどいドイツ語」（1880）

マーク・トウェイン（1835–1910）は，「ひどいドイツ語」（*The Awful German Language*）と題した文章で，ドイツ語を「これほどいい加減で，体系的でなく，これほど理解しにくい言語はほかにない」（トウェイン, 1996b, 270）とこきおろしている。これは，トウェイン自身の 1 か月半にわたるドイツ，スイスの旅行をもとに書かれた『ヨーロッパ放浪記』（*A Tramp Abroad*, 1880）に「補遺」の一つとしておさめられている文章である。ドイツ語のさまざまな特徴を批判し，ドイツの大学で学ぶアメリカ人学生の苦労を紹介したあとで，「過去 9 週間この言語をずっと注意深く批判的な目で研究してきたので，ドイツ語を改善する自分の能力に対する自信を得た」（トウェイン, 1996b, 292）という語り手は，「私はドイツ語を改善する用意ができている。少なくとも正しい提案をする準備ができている。」（ebd.）と述べ，8 つの提案をしている。ここではそのうちの 4 点を見てみよう。

まず，名詞の性別について「分け方に意味も体系もない」（トウェイン,

1996b, 278）ことが批判される。さらに代名詞もその性に合わせて用いられることで，「魚」（der Fisch）が「彼」，その鱗（die Schuppe）は「彼女」となるばかりか，「妻」（das Weib）は「それ」になってしまう。そこで語り手は，「性別を再編成し，創造主の意図通りに分類したい。とりわけ敬意のあかしとして。」（トウェイン, 1996b, 293）と提案する。人や生物は自然の性に合わせ，それ以外の物は中性にするべきだということであろう。「妻」を「それ」と呼ぶのは敬意に欠けるのである。

無限に長くなる「ハイフンを省いた複合語」（トウェイン, 1996b, 287）も批判の対象となる。語り手は，自らのコレクションから長い複合語の例をいくつもあげて見せ，これら「壮大な山脈」のような複合語によって，文章の「学問的な特徴がきわめて気高くなる」が，初学者には「大きな悩みの種」（トウェイン, 1996b, 286）であるとし，長い複合語を「廃止するか，話し手に息抜きのために間をあけて，それらを区切って伝えるよう」（トウェイン, 1996b, 294）提案する。

長い複合語とともに批判されるのは，幾重にも挿入される挿入語句，特に動詞が文末まで出てこないという点である[4)]。「挿入語句も廃棄したい」（ebd.）と提案する語り手は，「高貴な人であれ下賤な人であれ，あらゆる人に，平易なわかりやすい話をすること」を要求し，「この法律を犯したものは死刑だ」（トウェイン, 1996b, 294）と口調も強い。原文で 20 ページ足らずのこの文章で，トウェインはドイツ語の文構造の詳細は説明していないが，ドイツ語に特徴的な挿入語句の原因として分離動詞をあげる。「動詞をふたつに分け，半分を刺激的な文章の初めに置き，後の半分をその最後に置いてそれを作る。それ以上にまごつくものを思いつける者がい

4）挿入語句が幾重にも入るドイツ語の文章については，次のように誇張して語られている。「ドイツ語の新聞では，動詞が次のページまで出てこないことがある。ひとつないしふたつの縦の欄（column：筆者補足）に刺激的な前置きや挿入語句を次々と並べたてた後，時間がなくなって動詞を付けずに印刷にまわさなければならないことが時々あると聞いたことがある。」（トウェイン, 1996b, 274）

るだろうか？」（トウェイン, 1996b, 274–275）とこれを批判し，「この重要な品詞（動詞：筆者補足）を見てすぐわかるような前のほうに持ってくる」（トウェイン, 1996b, 292–293）ことを要求するのである。

ドイツ語の「不完全な貧弱さ」（トウェイン, 1996b, 275）の例としてあげられるのは，人称代名詞 sie である。英語の you, she, her, it, they, them の 6 つの機能を持つ，「たった三文字の貧弱で，取るに足りない弱々しい言葉」（ebd.）は，「これらの意味のどれを伝えようとしているのか」わからないために，語り手をいらだたせている。もうひとつ槍玉にあがるのは，形容詞の格変化である。ドイツ人が形容詞を扱う際には，「常識がすべてくつがえるまでそれを格変化させ続ける」（トウェイン, 1996b, 276）ことを示すために，語り手は，「私の親友」（mein guter Freund）の単数，複数それぞれ 4 つの格の変化形を示し，「友達を持ってこれらの格変化で苦労するよりも，友達なしでやっていくほうがいい」（トウェイン, 1996b, 277）とまで言っている。ただ，人称代名詞や形容詞については，語り手は具体的な提案を示し得ていない[5)]。

上にも述べたように，この「ひどいドイツ語」は，そもそもが誇張とユーモアによって，アメリカ人トウェインが見た珍しく奇妙なヨーロッパの様子を伝える旅行記の一部であり，実際の旅に基づいているとはいえフィクションとして発表されているものである。この旅行記の中では，ワーグナーの『ローエングリーン』も「どんちゃん騒ぎ（別名オペラ）」（トウェイン, 1996a, 69）であり「音による拷問にも等しい情け容赦のない苦痛」（トウェイン, 1996a, 70）と描写される。また，このテクストは英語で書かれ，一義的にはアメリカの，英語圏の読者を想定して書かれているものである。

しかし，トウェインは，別の機会に，ウィーンで記者クラブメンバーに

5）提案の最初には与格の廃止があがっているが（トウェイン, 1996b, 292），その理由は当時まだ広く使われていた，名詞の語尾変化 -e が複数形と区別できないという理由であって，冠詞や形容詞の格変化が理由ではない。

向けて，つまり，ドイツ語話者，さらには書くことを生業にしている聴衆に向けてのドイツ語で行ったスピーチで，あらためて「ドイツ語の改革」を提案している。「ドイツ語の恐怖」（*Die Schrecken der deutschen Sprache*）と題されたこのスピーチで，トウェインは，自分は 20 年以上にわたって「ドイツ語の最も忠実な友」であって[6]，ドイツ語を「改革したいといつも願ってきた」（Twain, 1996a, 44，以下このテクストからの日本語は筆者訳）のだと述べる。

ここでトウェインが提案しているのは，「永遠に続く挿入語句を抑圧し，廃止し，絶滅させること」，「一つの文に 13 以上の主語を入れることを禁止すること」，「動詞をなるべく前に置くこと。望遠鏡なしで見つけることができるように！」の 3 点で，「ひとことでいえば，みなさん。みなさんが愛するこの言語を簡単なものにしたいのです。みなさんが祈るときに，せめてあそこの上の人が理解できるように。」（Twain, 1996a, 44, 46），さらに「みなさんが自分で何かを言ったとき，せめて自分で言ったことがわかるように。」（Twain, 1996a, 46）と皮肉を繰り返し，「私の忠告を聞いてくださるよう，伏してお願いしたい」（ebd.）と大真面目に頼み込んでいる。インフォーマルな場でのスピーチにおける，このようなトウェインの語りは，聴衆の大爆笑を誘ったことだろう。

歓談の場でのスピーチだということもあり，トウェインがここで改善を

6）Kersten（2010）によれば，トウェインは，ドイツ語をしっかり習得するための時間はなかなか取れなかったものの，人生を通してドイツ語と接触する機会は少なくなかったようである。生地ハンニバルにはドイツ系住民が少なくなく，地域ではドイツ語新聞も発行されていた。トウェインは，近所のドイツ系のパン屋が，このドイツ語新聞に掲載されていたメルヘンを英語に訳して聞かせてくれたという経験について，のちに手紙に書いているのだという。また，ニューヨークで生活したトウェイン夫妻はドイツ出身の女性を家政婦とし，また妻もドイツ語を身につけようとしていた（Kersten, 2010, 49–53）。飯塚（2012）によれば，19 世紀後半，「アメリカ東部の上流階級では，ドイツ語を習うことが高尚なことだと思われていて」（飯塚，2012，126）ちょっとした流行だったという。

提案するのは，長い挿入語句のみである。しかし，このドイツ語スピーチの，トウェイン自身による英語逐語訳を見ると[7]，ドイツ語の「分け方に意味も体系もない」名詞の性別と代名詞を，不条理で滑稽なものとしてとらえていることがわかる。この英語逐語訳で，トウェインは，彼がドイツ語の欠点とみている特徴を英語に反映させ，英語を分かりにくくし，「改悪」して楽しんでいるといえるだろう。

2.2　ヅェ・ド・ロック：「ウルトラドイツ語」（1997）

ドイツ語を「簡単なものにしたい」と改革を提案したトウェインにとって，ドイツ語があくまで旅先の言葉であって作品を書く言語ではなかったのに対して，ドイツに移住し，非母語であるドイツ語で作品を発表する作家たちにとって，ドイツ語との格闘はもう少し真剣味をおびたものになる。その例として，ブラジル出身のドイツ語作家ヅェ・ド・ロック（Zé do Rock, 1956*）のラディカルなドイツ語改革の試みを見てみたい。彼が主

7）「逐語訳」された英語版は，ドイツ語の文構造をそのまま反映させている。以下にドイツ語の原文と英語逐語訳を併記する。

Ich bin ja der treueste Freund der deutschen Sprache – und nicht nur jetzt, sondern von lange her – ja vor zwanzig Jahren schon. Und nie habe ich das Verlangen gehabt, der edlen Sprache zu schaden, im Gegentheil, nur gewünscht, sie zu verbessern: ich wollte sie blos (sic!) reformieren. [...] Mit einem Wort, meine Herren, ich möchte Ihre geliebte Sprache vereinfachen, auf dasz, meine Herren, wenn Sie sie zum Gebet brauchen, man sie dort oben versteht. (Twain, 1996a, 44, 46)

I am indeed the truest friend of the German language – and not only now, but from long since – yes, before twenty years already. And never have I the desire had the noble language to hurt; to the contrary, only wished *she* to improve -- I would *her* only reform. It is the dream of my life been. [...] With one word, my gentlemen, I would your beloved language simplify so that, my gentlemen, when you *her* for prayer need, One *her* yonder-up understands. (Twain, 1996a, 45，強調は筆者)

に改革しようとするのはドイツ語の正書法である。本のタイトルもまた，彼が改革した新しい正書法で *fom winde ferfeelt*（通常の正書法で書けば „vom Winde verfehlt“ となり，『風と共に去りぬ』のドイツ語タイトル，„Vom Winde verweht“ のパロディと思われ，あえて訳せば「風のせいでやりそこなう」だろうか）となっている。

ヅェ・ド・ロックがこの本を発表した前年の 1996 年，ドイツでは公式の正書法改革の提案が行われ（Rat der deutschen Rechtschreibung, 2018），メディア，教育界，論壇，出版界を中心に，賛成派と反対派が意見を表明し議論が行われていた。ヅェ・ド・ロックの提案は，この公式の正書法改革議論の一貫であるといえる。

彼は自分のラディカルな改革の提案を「ウルトラドイツ語」（„Ultradeutsch” のちに „Ultradoitsh“）と呼び，「公的機関はまともな改革はしないだろうから」（Zé do Rock, 2002, 10）として，読者たちに「市民的不服従」（Zé do Rock, 2002, 11）を呼びかけ，このウルトラドイツ語を日々用いるようにすすめている。規則の変更の説明に何ページも必要な改革は複雑すぎて誰も望まない，と公式の正書法改革を暗に批判しつつ，彼自身の改革においては，誰もが慣れながら身につけられるよう「1 年に変更点は 2 つ」（Zé do Rock, 2002, 10）としている。この本では，1995 年から 2012 年までに実現されるべき変更点を提案しつつ，「言葉についてだけ本を一冊書くことも，ましてやそれを読むことも退屈なので，自伝もつけたお買い得パック」（Zé do Rock, 2002, 11）として，その変更を実践したドイツ語で，自分の出自や世界各地の旅の体験をユーモラスに語っている。

正書法を改革する理由を，ヅェ・ド・ロックは，「第一に，自分はほかの書き方ができないから，第二に，自分は話し言葉のほうが居心地が良いから，そして，第三に，自分は，書くことで金を稼ぐ，世界でも数少ない人間だからだ。」（ebd.）と述べる。その説明通り，彼が提案する正書法は，話し言葉をそのまま表記し，できる限りつづりを発音に近づけるという方

針で行われる[8]。まず，大文字書きのルールの削除が提案されたあと（ebd.），口語において発音されない音は書かないという方針が示される。ist は is に，nichts は nix に，冠詞や人称代名詞の 4 格語尾 n，発音されない e の文字も削除される（ebd.）。1995 年から 1 年につき 2 点ずつ変更された正書法は，2012 年時点で次のようになる。

> ich will di raise dort fortsezen, wo ich si untabrochen hab. in Lusaka, Sambia. wenn der flug fon Frankfurt yba Moskau und Budapest nach Lusaka 600 dollar kostet, kann der flug fon Budapest direkt nach Lusaka kaum mer als die helfte kosten. in Win lern ich aine sysze jurnalistin kennen, auf deren bauch ich main kopf ausrun kann, damit main libeskumma nich so we tut. (Zé do Rock, 2002, 198)

さらに，「ウルトラドイツ語 U」（U は unseriös）と題した章では，ドイツ語の文法にもメスが入れられる。冠詞の格変化は廃止され，定冠詞はすべて de，不定冠詞は a（ただし母音の前では en）となる（Zé do Rock, 2002, 219）。形容詞の語尾は，名詞の性，格にかかわらずすべて -e（Zé do Rock, 2002, 220），名詞の性別は自然の性に合わせ，名詞の語尾を a ならば女性，i ならば中性（男性でも女性でもない），o ならば男性，そして u ならば「物」と定められる。Flieger（パイロット／飛行機）に代わるウルトラドイツ語 U は，fliga という形で女性パイロット，fligi は男女の区別なくパイロット，fligo は男性パイロット，そして fligu は飛行機となる（ebd.）。

ヅェ・ド・ロックの特徴は，この「改革」を自らが実践し続けていることである。2012 年までの変更点を各章一つずつ反映させて書かれた *fom winde ferfeelt*（1997）に続き，翌年には *ufo in der küche. ein autobiografischer*

8）発音と表記を一致させるというこの方針は，公式の正書法改革においても重要な論点の一つであった。

seiens-fikshen（1998）を，ウルトラドイツ語（反映されているのは出版時の 1998 年までの改革案のみ，という徹底ぶりである）で出版している。また，この本では，「Wunschdeutsch」というウルトラドイツ語の発展形が提示されている。ヅェ・ド・ロックは，朗読会で，彼の正書法改革の各項目について聴衆に多数決を取ったという（4500 人に聞いたと主張している）。すると，「ウルトラドイツ語」の約半分は賛意を得たものの，賛意を得られなかった提案もあった。このようにして聴衆の希望を反映させてできた正書法が，「Wunschdeutsch」つまり「リクエストドイツ語」である（Zé do Rock, 2000, 57f. u. 177f.）。

このように「改革」され，またリクエストを受けて行き過ぎた改革については元に戻しながら，ヅェ・ド・ロックは，新聞などの媒体でもこのウルトラドイツ語でテクストを発表している。『ベルリン新聞』では，2015 年 10 月 7 日から 12 月 8 日にかけて「難民のためのドイツ語」（*Deutsch für Flüchtlinge*）というコラムを 5 回のシリーズとして連載し，ウルトラドイツ語 U のルールを説明しながら，その正書法で，主に難民を対象としたドイツ語授業の様子を報告している[9)]。このコラムの続編は，「ペギーダ事典」（*Pegida-Lexikon*）として，ひきつづきウルトラドイツ語 U で，2016 年 1 月 15 日から 2 月 10 日まで，7 回にわたって掲載された。しかし，どうやら『ツァイト』誌では，このウルトラドイツ語は掲載できない模様である[10)]。2021 年 8 月 5 日に掲載されたドイツ語のジェンダー表記をめぐるヅェ・ド・ロックのテクストは通常の正書法で掲載され，記事の最後に「この記事のヅェ・ド・ロック氏のリクエストドイツ語（Wunschdeutsch）バージョンはホームページで見ることができます。」（Zé do Rock, 2021a）

9）すべての記事は，Zé do Rock のホームページで確認できる。http://www.zedorock.net/indexd7a.html（最終アクセス　2021 年 12 月 30 日）

10）一方，『南ドイツ新聞』では，Bermbeck（2017）の記事内で，Zé do Rock の “Sie duzen“というテクストがウルトラドイツ語で掲載されている。

と説明がある[11)]。

この『ツァイト』誌の例はおくとしても，ヅェ・ド・ロックは，1997年に最初に発表された *vom winde ferfeelt* 以来，20年以上一貫して，彼が考えるところの簡単な，誰もが間違えない，そして投票やアンケートによるリクエストを反映させたウルトラドイツ語で書き続け，ドイツ語の改革を続けている。このラディカルなドイツ語は，皮肉とユーモアにあふれたエピソードが連なる彼の作品の人工語（Kunstsprache）であるだけでなく，ドイツ語の表記を誰にとってもシンプルなものにするという意思を持ったZé do Rockが，本気で実践しているものなのである。

2.3　アバス・キダー：『みんなのためのドイツ語―完成版教科書―』(2019)

キダーもまた，ドイツ語を学ぶ人々の苦労を軽減させるために「みんなのドイツ語」を提案する。彼が構想した「完全版教科書」は，各章で，問題だと考える文法項目が彼の経験談とともに指摘され，新しい文法の対案が示され，章の終わりにはその概略が提示されるという作りになっている。指摘されるドイツ語の問題は，トウェインやヅェ・ド・ロックと共通している点も多い。論理的でない名詞の性，4つの格と冠詞の活用の複雑さ，それに加えての形容詞の活用，副文における動詞の定形後置，分離動詞，数が多すぎて使い分けが困難な前置詞などである。

これらに対してキダーは，「新ドイツ語」（„Neudeutsch“）のルールを各章で次のように決めていく。「すべての名詞で，定冠詞はde, 不定冠詞はe, 複数はdie とする」，「性別は自然の性，あるいはそれぞれの自由な決定による」，「属格と与格は廃止。属格はvonで置き換え，与格は対格IIとして扱う」（Khider, 2019, 39），「語形変化はなし。すべて冠詞と名詞は変化を強いられてはならない」（Khider, 2019, 43），「動詞はどんなときにも主語の後ろに置く」，「動詞は決して文の最後に置かれてはならない。不定詞文は例外である。」（Khider, 2019, 56），「すべて形容詞と副詞は変

11）Wunschdeutsch版はZé do Rock (2021b) 参照。

化を強いられてはならない。」（Khider, 2019, 84），「すべて動詞は切り離されてはならない」（Khider, 2019, 110）といった具合である。また，複雑な使い分けが必要な前置詞については，キダーの母語であるアラビア語の前置詞を「統合」（integrieren）することで解決しようとする（Khider, 2019, 92–93）。「私の言うことを信じてほしい。このよそものの前置詞たちは，彼らを正しく統合し，日常に参加させることができれば，秩序を作り出すことに力を貸してくれるに違いないのだ。」（Khider, 2019, 92）という説明の口調は，明らかに，言語のことだけではなく，ドイツの中でのアラビア語話者たち，あるいは一般的に「よそもの」とされる人たちの社会統合を示唆している。キダーは，その成果を誇らしげに，「諸民族の相互理解のために前置詞の在庫を減らし，アラビア語から新しいものを導入した」（Khider, 2019, 120）と語ってさえいる。

3.「みんなのためのドイツ語」の「希望」

最後に，キダーの「みんなのドイツ語」，そしてその希望について考えてみたい。ドイツ語を外国語として習得するという視点から，文法の複雑さを誇張することでその不条理さを笑うという手法は，トウェインやヅェ・ド・ロックとも共通して，キダーにも見られる。これは，非母語としてドイツ語を相対化する視点を持った，また，「旅」や「移動」する者であるこれらの書き手たちが，その感覚を先鋭化して行っているドイツ語についての風刺だといえるだろう。トウェインの「ひどいドイツ語」が旅行記『ヨーロッパ放浪記』の一部であり，また，ヅェ・ド・ロックのウルトラドイツ語小説である *vom winde verfeelt*，*ufo in der küche* が，南米，東西アジア，アフリカなど，文字通り世界各地をバックパッカーとして旅する作者自身[12] の経験を誇張しながら書いた冒険小説であることも偶然ではない。彼らが論じるドイツ語は，母語話者たちの，あるいは正書法改革を

12）Zé do Rock のホームページには，彼の肩書が turist（＝Tourist：筆者補）と書かれている（Zé do Rock, o.J.）。

議論する専門家たちのものとしてではなく，複数言語を持ち，さまざまな土地を旅する者たちが，興味を抱いて習得し使おうとする言語として眺められているのである。

キダーもまた「移動」してきた人であるが，彼がドイツ語を学びながらぶつかった困難さと，政治亡命者としての逃亡生活やドイツでの生活において立ちはだかる壁とがパラレルに語られていることに，『みんなのためのドイツ語』の特徴がある。彼の独自性は，ドイツ語改革にあたって，彼の母語であるアラビア語の要素を入れていることだけにあるのではなく，彼のユーモアあふれたドイツ語批判が，同時にドイツ社会批判にもなっている点にある。

そもそも，ドイツ語を改革しようというアイディアを思いついたのは，ドイツへの移住者たちが集まるカフェで，ドイツ語を学び始めた彼らとドイツ語で話していたときだ，とキダーは述べている。「このかわいそうな人々は，この（難しいドイツ語の：筆者補）問題の多くがこれからずっと彼らの伴走者であり続けることをまだ知らないのだ」（Khider, 2019, 26）と嘆いたあと，キダーは彼らがドイツで直面するであろう問題を皮肉をこめて次のように裏返してみせる。「たとえば役所の職員たちのやさしさ，生活上重要な諸問題への政党の倫理的な取り組み方，太陽が照り続け雲一つない冬の間の人々の親切な顔つき，そして，ドイツ語のいつまでもうっとりできるような格の問題も，ずっと学習者たちから離れたりはしない」（ebd.）。そこで彼が目指すのは，「政治家の顔のように」，「無味乾燥だったり不快感を与えたりする」ことのない，「調和のとれたドイツ語」（„Wohltemperiertes Deutsch“）である（Khider, 2019, 27）。

調和のとれたドイツ語の実現を阻む文法規則を，キダーは，独裁体制や拷問，あるいは人々の間の平等を阻む階級制度として批判する。たとえば，「冠詞の権威」，「他の人類とドイツ人との間に立ちはだかる，この文法の独裁体制」（Khider, 2019, 33）に抵抗し，「普遍的な冠詞」を導入するべきだと主張する。また，冠詞や名詞の語形変化，Deklination の語源は

beugen，すなわち屈服することであり，このルールは「独裁体制化の尋問官」（Khider, 2019, 40）であると糾弾され，「語形変化は文法上必然的なものではない。これは病気，サディズムなのだ」（Khider, 2019, 41）と批判される。また，誰もが平等であることを重視するキダーは，ある種の動詞が特別扱いされ，不規則になることも見過ごすことができない。「すべての動詞は法の前に平等であるべきだ。」，「不規則動詞は，自分がなにか特別なほかより優れたものだと思っていて，近づくのが非常に面倒なのだ。そんなことが言語の中にあっていいはずがない」（Khider, 2019, 99）と述べ，社会にさまざまな形で階級差があることへの怒りを――もちろんその突然の文脈の転換をユーモアとして用いて――表明するのである（Khider, 2019, 99）。

そのキダーが，この本の最初と最後にページ数を割き重要な問題であるとして話題にするのは，ドイツ語の発音である。成人してから別の言語を学んだ学習者は，文法や語彙をかなりの程度で習得したとしても，発音については完璧な形で運用することは難しい。キダーにとっては，「自分がよそものだとすぐに同定されてしまう」（Khider, 2019, 20）ウムラウトが鬼門である。そして，ひどい邪推であると断りながら，「誰が内国人で外国人か，誰が原住民で新住民かを，なるべく早く見つけ出すために」（Khider, 2019, 21），「原住ドイツ人の特定の奴ら」が意図的にウムラウトを作り出したのではないかと，うがって考えるのだ。キダーの邪推――ウムラウトがそうであるかは別として――には，もちろん根拠がある。発音の違いは，しばしば，よそものを見分けるための手段として用いられ，旧約聖書の「シボレート」[13] のエピソードが伝えるように，そして，関東大震災後の朝鮮人虐殺[14] に見られるように，それは時によそものを残虐に殺戮する結果を伴った。キダーは，この母語話者とそうでないものを隔てる障壁を取り去るために，ウムラウトを廃止することを提案する。彼のドイ

13）士師記，12 章 5 節から 8 節。

14）安田（2015）に詳しい。

ツ語の改革にとって「大事なことは，だれにとっても痛みを伴わないということ」（Khider, 2019, 116）なのである。

そのように「みんなのドイツ語」を実現しようとするキダーが，この本の最後で，あろうことか極右政治家に希望を見出そうとしている。「『ウムラウトを叩きのめせブーム』を自分は夢見ている。極右の政党が，ウムラウトがよそものだと納得すれば良いのだ。彼らの助けがありさえすれば，きっといつの日か，ウムラウトなしのドイツ語を経験することができるだろう。極右が自分の大きな希望なのだ。」(Khider, 2019, 123)，というのだ。当然のことながら，この強烈な皮肉をこめた「希望」をめぐる戯言を，読者は，世界で蔓延するポピュリズム批判として読み取るべきだろう。背景にあるのは，ドイツが多くの難民を受け入れることになった 2015 年から 2016 年のドイツ社会の刻一刻と変化したトレンドである。2015 年夏には，「難民を助けようブーム」（Khider, 2019, 121）があったものの，その年の大晦日のケルンでの集団性暴行事件を経てその空気が 180 度変わり，「難民宿泊所放火ブーム」（Khider, 2019, 122）となったように，そして政治家たちが便乗してブームづくりに貢献し，すぐに次のブームに乗り換えていったように，トレンドは，一つの事件やメディアでの報道によって大きく変化し，政治家たちは，論理的，倫理的な根拠なく，トレンドに乗ることで影響力を行使していく。ドイツ語からウムラウトを廃止することに論理的な根拠がないとしても，極右の政治家が「こいつはよそものだ」と言いさえすれば，その効力は絶大なのである。

このようなポピュリズムに希望を持っているというキダーの強烈な皮肉は，逆に，キダーの構想する「みんなのためのドイツ語」の実現への道が遠いという現実を示してもいるだろう。人を分け隔てしない，誰も傷つかない「やさしいドイツ語」[15] が目指しているのは，単にドイツ語の文法規

15）本論文で論じてきた，ドイツ語作家による，ドイツ語への風刺として書かれたドイツ語改革の試みとは異なるものであるとはいえ，外国人住民を含む共生社会の共通言語を指向する「やさしい日本語」もまた，「みんなの

則を単純化するということではない。母語話者には見えない，しかし外側から入り学ぼうとする者にとっては障壁となりうるものについて考察することに始まる「みんなのためのドイツ語」は，誰もが排除されない「みんなのための社会」とともに構想されるものなのである。

【参考文献】

Brembeck, Reinhard (2017). Ultradeutsh (Sic!). In: *Süddeutsche Zeitung*, 15. Dezember 2017. https://www.sueddeutsche.de/kultur/grossformat-ultradeutsh-1.3793711（最終アクセス 2021 年 12 月 30 日）

Kersten, Holger (2010). Mark Twain, ‚der treueste Freund der deutschen Sprache‘. In: Mark Twain, *The Awful German Language. Mit einem Grußwort von US-Botschafter Philip D. Murphy und einem Essay von Prof. Holger Kersten.* Hrsg. v. US-Botschaft Berlin, Public Affairs, S. 45–59.

Khider, Abbas (2019). *Deutsch für Alle. Das endgültige Lehrbuch.* München: Hanser.

Rat der deutschen Rechtschreibung (2018). *Regeln und Wörterverzeichnis. Aktualisierte Fassung des amtlichen Regelwerks entsprechend den Empfehlungen des Rats für deutsche Rechtschreibung 2016.* Mannheim. www.rechtschreibrat.com/DOX/rfdr_Regeln_2016_redigiert_2018.pdf (Teil I) www.rechtschreibrat.com/DOX/rfdr_Woerterverzeichnis_2016_veroeffentlicht_2017.pdf (Teil II)（最終アクセス　2021 年 12 月 31 日）

Twain, Mark (1996a). *Mark Twain's speeches.* Edited by Shelly Fisher Fishkin, The Oxford Mark Twain. New York: Oxford University Press. [Originally published: New York: Harper & Bros., 1910].

Twain, Mark (1996b). *A tramp abroad.* Edited by Shelly Fisher Fishkin, The Oxford Mark Twain. New York: Oxford University Press. [Originally published: Hartford, Conn.: American Pub., 1880]

Zé do Rock (2000). *ufo in der küche. ein autobiografischer seiens-fikshen.*

ための日本語」を通して，だれもが情報弱者になることなく市民として生活できる社会を目指す試みだと言える。非母語話者の市民を含めた「みんな」とのコミュニケーションを実現するためには，母語話者が，「やさしい日本語」を習得し，自分の言語活動に「反省的な意識を向けること」（境，2020，151）が重要なのである。「やさしい日本語」については庵ほか（2013），庵（2016）を参照。

München: Piper.
Zé do Rock (2002). *fom winde ferfeelt. welt-storlch macht links-shreibreform.* neuausgabe light. Überarbeitete Taschenbuchausgabe. München: Piper.
Zé do Rock (2021a). Von innen, unnen und onnen. Wird die Welt gerechter, wenn man die Sprache umbaut? Die Grüne Annalena Baerbock will sogar Gesetzestexte gendern. Auf diese Weise wird das Deutsche immer »länger«. Unser Autor ZÉ DO ROCK hat einen Gegenvorschlag. In: *Die Zeit*, 5. Augst 2021.
Zé do Rock (2021b). Von innen, unnen und onnen. www.zedorock.net/genda.pdf（最終アクセス　2021 年 12 月 30 日）
Zé do Rock (o. J.). http://www.zedorock.net/（最終アクセス　2021年12月30日）
庵功雄・イヨンスク・森篤嗣（編）(2013).『「やさしい日本語」は何を目指すか―多文化共生社会を実現するために』ココ出版.
庵功雄（2016).『やさしい日本語―多文化共生社会へ』岩波書店.
飯塚英一（2012).『増補：旅行記作家マーク・トウェイン：知られざる旅と投機の日々』彩流社.
境一三（2020).「やさしい日本語と機械翻訳による言語意識の向上について」『ドイツ文学』162，147–160.
トウェイン，マーク（1996a).『ヨーロッパ放浪記　上』（飯塚英一訳）彩流社.
トウェイン，マーク（1996b).『ヨーロッパ放浪記　下』（松本昇，行方均訳）彩流社.
トウェイン，マーク（2001).『マーク・トウェイン　スピーチ集』（金谷良夫訳）彩流社.
浜崎桂子（2018).「解説：アバス・キダーと多文化社会ドイツの文学」『三田文学』134，183–188.
安田敏朗（2015).「流言というメディア：関東大震災時朝鮮人虐殺と「15 円 50 銭」をめぐって」『Juncture：超域的日本文化研究』6，名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター，56–69.